

った。

16列および32列の MDCT を使用し、その 1 mm スライスの軸位像と MPR 画像により、正常と思われる50名の被検者を対象に胸管および乳び槽の評価を行った。検討の結果、胸管および乳び槽は全例（100%）で同定可能であった。胸管は下部レベルで最も高い同定能が得られ、また乳び槽は L1 レベルで最も良好に描出され、形態としては straight thin tube type が最多であった。

MDCT による胸管および乳び槽の描出は十分可能であった。胸管は心不全、リンパ浮腫、肝硬変や腫瘍などの様々な病態により影響を受け、また胸部外科手術などにより損傷した際には、難治性・易感染性の乳び胸が生じる。従って MDCT の高空間分解能を生かし、胸管および乳び槽の詳細な正常解剖を把握することは临床上重要である。

第11回臨床解剖研究会記録 2007. 7. 7

習慣性尺側手根伸筋腱脱臼における 解剖学的な考察

中島民治¹ 田中宏明² 古川英樹³

¹産業医科大学第1解剖学 ²門司労災病院整形外科

³古川ひでき整形外科医院

整形外科領域において習慣性尺側手根伸筋腱脱臼は比較的珍しい疾患であるといわれている。本症例は、尺側手根伸筋腱が尺骨溝（伸筋支帯第6区画と呼ばれる）より習慣的に脱臼するもので、前腕回外時、尺骨茎状突起を超えて尺側に脱臼するが、回内により容易に整復される。脱臼時には疼痛を感じ、重量物を持つことができなくなる。発症は、スポーツ外傷によって脱臼し、以後、習慣性となった症例（30歳男性；古川 1988）や因果関係は不明であるが、12歳の頃、両側の尺側手根伸筋腱が脱臼することに気づいていたが、疼痛は無く、14歳の時に左側手根伸筋腱の脱臼に伴い疼痛が出現し手に力が入らなくなり、ブザーンと手を垂らすと疼痛が消失していた。15歳の春バレーボールを始め、疼痛が増強し、同年8月整形外科を受診した（15歳男子；田中 未発表）等である。

臨床的所見に対して、解剖学的な変異との関連を検討するために、左右120側、240例について、尺側手根伸筋腱および腱溝（第6区画）における肉眼解剖学的研究を行い、同腱の幅と厚さおよび腱溝の幅と深さを計測し、解剖学的変異と習慣性尺側手根伸筋腱脱臼との関連について検討した。腱溝の形態は①尺骨頭と茎状突起の隆起が良好で

溝のあるもの（Grade I）、②茎状突起に比べて尺骨頭の隆起が低いもの（Grade II）、③尺骨頭よりも茎状突起の隆起が低いもの（Grade III）、④両者の隆起が不明瞭で尺骨溝が平坦である（Grade IV）の4型に分類した。観察の結果、Grade IV に相当するものが240例中3例（1.3%）見られ、ほぼ平坦な腱溝の出現は、回外時における手根部での尺側手根伸筋腱保持のための安定性を失わせる要因となりうると考えられる。

文 献

- 1) 古川英樹ほか. 1988. 習慣性尺側手根伸筋腱脱臼の1例. 整形外科 39: 1935-1937
- 2) Nakashima, T. 1993. An accessory extensor digiti minimi arising from extensor carpi ulnaris. J Anat 182: 109-112
- 3) Nakashima, T et al. 1993. Deep and shallow forms of the sulcus for extensor carpi ulnaris. J Anat 183: 635-638

第11回臨床解剖研究会記録 2007. 7. 7

長期拘縮膝の解剖学的特徴について

—臨床解剖学的検討—

長田沙織¹ 三浦真弘² 川上健二¹

松本裕美¹ 片岡晶志¹

¹大分大学医学部附属病院リハビリテーション部

²同大学医学部生体分子構造機能制御講座（解剖学1）

本研究は、関節拘縮にともなう形態的变化と屈曲拘縮膝の解剖学的特徴を調べるために、主として肉眼解剖学的手法を用いて検索した。材料は、平成14～16年の間に、大分大学医学部の系統解剖実習中にて遭遇した典型的な拘縮膝3例を検索に用いた。検索膝は、予め10%ホルマリン水溶液にて注入固定されていたが、検索前に3ヵ月間50%ソルミックス水溶液に浸漬することで可能な限り検索組織の柔軟性を図った。拘縮が顕著な部位については、剖出の全過程手術用顕微鏡を用いた。またその構造周囲の癒合形態や、表層からの層序関係にも剖出に十分注意を払った。肉眼的に変化が認められた部位については、走査電子顕微鏡においても構造的変化を観察した。

肉眼解剖学的検索において、一般的な膝関節の伸展制限因子のほかに、以下の所見が検索全例で共通して認められた。①斜膝窩靱帯（以下 OPL）の線維化と扇状線維の肥厚化（前後）、②膝蓋下脂肪体の明らかな増大と、膝関節の前方隙（大腿骨の顆間窩に相当）の消失、③大腿二頭筋（以下 BF）・半膜様筋（以下 SM）両腱の形態的变化をともなう緊張帯の形成、などである。一方、走査電子顕微鏡

的検索では、長期拘縮に起因して、①大腿骨両顆が圧縮した内側・外側関節半月の内側縁に膠原線維層の磨耗、②十字靱帯周囲の滑膜包に複数の瘤状隆起の出現、③膝蓋下脂肪体の線維化（脂肪間結合組織の肥厚）など、電顕的にも組織学的変化がいくつか認められた。

以上の検索結果から、拘縮膝の一般的な伸展制限因子のこれまでの考え方とは異なり、OPLの多層化・線維肥大および増加した膝蓋下脂肪体の組織学的変化、さらにBF・SMの柔軟性の欠如とそれらの緊張帯（伸展に抗する）への移行などが屈曲拘縮を引き起こす主要な形態学的要因であると考えられた。また、これらの構造的変化は不可逆的な経過をたどることも十分推測された。

第11回臨床解剖研究会記録 2007. 7. 7

外腸骨動脈が原因となった絞扼性イレウスによる 門脈ガス血症の1例

宮野省三 大山繁和 比企直樹 福永 哲
瀬戸泰之 斎浦明夫 山本順司 黒柳洋弥
上野雅資 大矢雅敏 山口俊晴

癌研有明病院消化器外科

今回、われわれは外腸骨動脈が原因となった絞扼性イレウスによる門脈ガス血症の1例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。

症 例：57歳女性。不正出血を主訴に近医受診し、子宮頸癌（T2N0M0 stage II B）と診断され、当院へ紹介。化学療法2コース施行後、広汎子宮全摘術を施行され、術後経過良好にて退院。退院後11日目、朝から腹部違和感を自覚、夜間に腹痛出現し、救急車で来院。臍周囲部の圧痛、自発痛を強く認めたが、腹膜刺激症状はなく、内診上も小骨盤内に明らかな異常なし。画像上明らかなイレウス所見は認められなかったが、腹部症状が強いため緊急入院。入院後、同日昼頃から突然ショック症状を呈し、画像所見で大量の腹水、さらに腸管壁、肝内の門脈内にair像の出現が認められた。腹膜刺激症状も出現し、汎発性腹膜炎の診断にて緊急手術施行。

手 術：開腹すると大量の血性腹水あり。索状物が起点となり小腸が絞扼され、約1.5 mにわたり壊死所見を認めた。索状物を切除後、腸管の血流の改善なく、小腸部分切除施行。その後、索状物を検索すると、前回手術で郭清を行った右外腸骨動脈と判明。空腸と上行結腸を吻合、空腸瘻を造設し、手術終了。

術後経過：術後、腹部echo検査で門脈血流に異常のないこと、腹部CT検査で肝内の門脈内のair像の消失を確認。また、右外腸骨動脈切除後であるが右大腿動脈は造影されており、側副血行路の存在が改めて確認された。臨床経過も良好であり、神経学的所見も認められず、歩行も問題なかった。

結 語：門脈ガス血症は死亡率50%以上の重篤な疾患であるが、当症例では症状出現から早急な診断、かつ迅速に手術を行えたことが今回救命し得た原因と考えられる。また外腸骨動脈切除後の血流は、画像から外側大腿回旋動脈や深腸骨回旋動脈、また下腹壁動脈などからの側副血行路により保たれていたと推察される。

第11回臨床解剖研究会記録 2007. 7. 7

Multidetector-row CT による retroperitoneal interfascial planes の内部構造の検討

石川和男 坂下恵治 松岡哲也

大阪府立泉州救命救急センター

背 景：近年、interfascial planes の概念の導入により、後腹膜の構造や後腹膜病変の発生・広がりに関する認識は一変した。われわれは、その概念に基づく後腹膜病変の重症度分類を作成してきたが、interfascial planes の構造については、いまだ完全には解明されていない。

目 的：Interfascial planes の内部構造を解明すること。

対象と方法：対象は、2005年以降当施設で撮影された腹部造影 multidetector-row CT（以下 MDCT）のうち、原画が保存されている139例。これらCT画像をretrospectiveに見直し、interfascial planes へのfluid collectionの有無、それに関係する血管などの走行についてthin sliceの他、multi planer reconstruction, maximum intensity projection（以下 MIP）も用いて詳細に読影した。

結果と考察：139例中、interfascial planes 内にfluid collectionを認めたのは25例、筋膜として線状に描出されたのは105例で、9例はるいそうなどのためinterfascial planes は同定できなかった。Interfascial planes 内にfluid collectionを認めた25例中19例に尿管が、16例に血管がその中に認められ、血管は腎被膜静脈の分枝や性腺静脈そのものであった。また、筋膜として描出された105例中、82例で筋膜に血管が数珠状に分布しているような像が得られた。それら血管をMIPで追跡すると、67例で性腺静脈や腎被膜静脈などに移行することが確認できた。以上より、